哲學研究　第二百三十二號

歷史的眞理と歷史的認識の方法

由良哲次

一

『詩は史よりも哲學的なり』と言はれた樣に、古來歷史的知識は、記述せらるゝものの本質を遠ざかるものとせられ、おのづから歷史的眞理なるものを顧慮なくこれに與へらるゝに吝なること多く、そは常に認識論的見地よりは無視されたる繼子として止まつた。近世の鋭き皮肉家ヴォルテールは、――彼は歷史哲學なる名の名づけ親ですらあるが――歷史は懷疑論（ピローニズム）に陷るにあらざれば、笑ふべき輕信に墮すべきのみとした。そは人間の健全なる悟性に矛盾し、自然法に反するものとして無條件的に貶し去るべきものとなされた。感覺論に立つ彼は、知覺に基づく判斷には確實性を承認するも、傳聞に基づく歷史的認識には、蓋然性以上を許さうとはしない。曰く『直接に知れるものは一人のみにてこの人死せば傳承は重ねるに從つて只懷疑的となり、その確實性は終には零となるであらう。』歷史は數學の如き論證の術を缺き

史官によつて書かしめられたる史實はすべて阿諛ならざるを如何にして保しうべき。歴史とは眞として擬せられたる事實の物語のみと。[註1] しかしこの歴史的眞理の懷疑論の底に、近世的なる理知のひらめきをもつ彼が、歴史的實在そのものがもつ眞に內面的なる性質を認め、歴史の批判の標準を外的なる史料にはおかずして、寧ろ人間的理性のうちに認めんとする積極的なる響きあるを吾等は聞き取らねばならぬ。

そも〳〵人間の歴史的現實に關心をもつことの深く鋭きに應じて、歴史的認識の可能の懷疑に導かるゝことの愈强きことも自らなることである。近代の人性論的思潮及び精神科學派の哲學思想に基礎的なる影響を殘したフムボルトは、初めて組織的なる『人間認識の理說』を作り、『性格學(カラクタオロギイ)』の哲學的考察をもつたのであるが、彼自らは尙ほ歴史的認識の眞理性の否定論に左袒せるを見る。フムボルトの『性格學』は、人の――それが文化に於て生ける人格性である限り――本質を認識しうる可能性についての考察に捧げられてゐる。彼はその『人間認識の理說』に於て、普遍的にして生動的、創造的なる本質、しかも他の本質に對しては相互に個性的なるものを求めた。それは叡知的と經驗的とを止揚せるものである。彼の所謂『性格的なるもの(カラクテルリスティク)』とは、かくの如き一の生ける能力を意味した。彼の『哲學的性格學』とは、人間の現實

を、その總體性に於て、最も內面的な固有性に關係して認識せんとし、所謂『人性の概念を最高の强さ、最大の廣さに表現せるもの』たらんことを理想とする。[註2] それにもかゝはらず、彼は彼の性格學が、性格の認識を完全に到達しうるものとは認めてゐない。それには凡そ四つの理由が認められる。(1)性格は個々の表現に於ては決してその全體を現はさず、(2)その總體性に於ても尙ほ全體を現はさない。(3)それは他のもしくは外的力の影響の許にあり、(4)且つそは自由なる自己活動をなすもの故、自然力の如く、一部分より他の部分の構造に類推することが不可能なるによるとなされたのである。

哲學の對象を生に求め、その哲學を經驗の領域に基づけんとし、史的現實の個性に深き關心をもつたディルタイにても、その認識の客觀性をひき出すことに執心をもち乍らも、個性そのものの解釋と認識に關しては畢竟相對的、程度的なることを認め、個性は終に不可捉なることIndividuum est ineffabileをすら告白してゐる。[註3] 凡そ歷史的認識の懷疑論は、ヴォルテールが先づそうであつた樣に、自然認識のそれと等しく、經驗論的基調に因由するのである。フムボルトは深き叡知的なるものを性格の中に感じて居つたに拘はらず、その『各個の人間的個性は、只、現、象に根ざせる理念』であつ

た。ディルタイにても、生の現象が、個人的意識を内にも外にも超越することの出來なかつた點が、却つて終極の客觀性を歴史に齎らすことの出來なかつた理由である。しかし彼に於てもその解釋學の可能が示し、彼の歴史に關する表言の事實が示す樣に、一般に歴史的なるものに關する知識は、歴史的眞實を把捉せるものなりとの主張と要求とを含んでゐる。これはカントの語をかりるならば、一種の『歴史的信仰』とでも言ふべきものであり、彼の終生の努力を捧げて尙ほ且つ完遂を見なかつた『歴史的理性の批判』の努力を生んだ所以である。

すべての歴史的述作はその知識の懷疑以上の確信によつて成立してゐる。例へば、その古代史研究にて大いなる貢獻を後代への影響に殘したニーブールについて見よう。彼はローマの歴史的人物についての描寫は、恰もその人と直接に語り、行動を共にし、さながら當時に生きて目のあたりにその事態變化を經驗し、親しく感動したるが如くに、歴史を表現するを理想とした。このために彼は十八世紀の啓蒙者流の、自然科學的推理による懷疑には滿足せず、批判によつて純化しつゝ、古代の眞の姿を取り出さんとした。彼は自己の表現の眞實さについては衷心よりの自信をもち、もし古羅馬人を地下より呼び起して彼の歴史を讀ましめたらんには、これら古人は

その眞實を證言すべきを信じた。しかし彼はその方法に空想と豫斷を多く用ひ、人物に對する愛憎の偏見强く、史實に對する充分の推究に足らざるものあるを免れなかつた。[註4]

しかし歴史の認識に於て過去の現實の盡くをさながらに體驗し、再現することは固より不可能のことである。『吾人は到底過去の事實を完全に解釋することは出來ない。茲に完全に解釋するといふことは過去の史實そのまゝを現代に再現するの謂である。』[註5]

しかしこのことは歴史的認識の一切の眞理性の否定を歸結するに至らしめるであらうか。歴史的認識がもつ眞理性とは、そも〳〵如何なるものであらうか。こゝに吾等は、ヘーゲルが分つた樣に、[註6]歴史に於ける客觀的要素 res gestae と、主觀的要素 historia rerum gestarum とを分つて考へることを便宜とする。前者は事件であり、後者はそれの記述である。前者は起りし歴史であり、後者は解されし歴史である。そして一般に歴史にては前者と後者とには時間上の間隔があり、前者はある個性的實體に卽した現實であり、後者は他の個性的なる主觀によつて把捉され理解され記述される。只前者も後者もともに人間的實體に於ける生起として時間性といふ根本制

約を共通基礎としてゐるのみである。

さて眞理とは『あるもの』と『知るもの』との充全合致なり adaequatio rei et intellectus といふ古き提言を私はこの場合にも尙ほ支持して考察したいと思ふ。そは、これを歷史的眞理について言へば、現實的生起と理解判斷との合一を意味するものでなければならぬ。起りし事件と理解する作用とが究極に一の實體的なるものに於て充全の合一を見ることである。この場合『現實的なるもの』といひ、生起する事件と言つても、究極には歷史的實體の行爲又は歷史的實體に歸せらるべき表現であり、『知るもの』といひ、判斷記述といふことも、歷史的實體による認識又は判斷をおいて外に求め難い。然らばこの二つの間に存する充全的合致とは卽ちこの歷史的實體そのものに於て求めるの外なく、そしてこの完全なる一致が證しえらるゝとき、歷史的眞理は一般に可能であると言ひうる。

しかし歷史的現實といふものは完全に再現すること不可能なることは固よりである。こゝに現實（ウイルクリッヒカイト）といふのは、ある個性的實體の一切の行動（ウイルケン）及び徵表をいふのである。卽ちその意識に於ける內面的作用とそれの表現、並びに他に對する影響をいひ、それは必ずしも意識的意圖的なるものに限られるものではない。西鄕南洲の存

在は彼が意圖せざる裡にすら當時鄕土の青年に無限の感化を及ぼした。これまた彼の現實性を構成する徵表である。またこの現實性にはたゞに人間に關するのみならず、自然環境との關係をも含み、それがその個性的實體の內面的作用に影響をもつ限り、又現實を構成するものである。現實とはかく、その實體の能作の一切であり、その徵表はこの實體に關する認識的把捉に於ては判斷の述語を形成するものである。かゝる一の全たき現實態が、他によつて完全に體驗され、さながらに精密に再現さるゝといふことは固より不可能のことである。それは、その能作、徵表が無限であり、しかも、この無限のものを統一せる實體が、唯一的なる個性であるからである。卽ち歷史的認識の眞理性に到達することをさまたぐるものは、現實の表現がもつ徵表の無限性と、現實の實體がもつ唯一の個性に基づくのである。かゝる實體が現在の生ける人格として直觀さるゝときは、その具體性の故に、再體驗には多くの便宜をもつであらうが、しかし、吾等は尙ほ如何にしても、他人がもつ過去の一切を、その內面性の盡くを、さながらに體驗することは出來ない。ましてこれが過去の現實性に對するとき、これを隔つる時間と時代とは、愈々その徵表を示す資料の有限的なる制限に遭遇するを余義なくせしめる。しかして、もしかりに、吾等が現實の無限の徵表を完

全に再現し得としても、如何にして唯一の個性を他の異る個性をもつて完全に再現し得と言ひうるであらうか。

歴史的認識の眞理性に到達するに完全なる再現の認識が必須のものであるならば、歴史的眞理は絶望さるべきであらう。しかして歴史的眞理は歴史的現實の完全なる再現描寫によつてのみ成立すると考へるこの思想には認識論上の摸寫說が潜んでゐる。歴史的認識論に於ける摸寫說の成立しえざることは、自然認識に於ける以上に明瞭である。よし認識は對象のありのまゝなる摸寫に成立するとしても、對象の唯一的なる個性を、それとは異る個性の意識が完全にこれを把捉し判斷しうることの保證しざることは歴史的認識の摸寫說に對して致命的なるものである。しかし又他面、歴史的認識の眞理は單なる觀念論的見地、主觀的理解にても成立しうるものとは考へられない。自然認識にては、或は對象が、認識する主觀の與ふる意味規定に全たく依從するとも考へられるであらう。しかし歴史的認識にては、對象そのものが無意味の存在であるとは考へられない。歴史的認識の對象は、卽ち歴史的現實を作る實體は、如何樣にでも構成され解釋されうべきものではなく、それに自ら一の意志規定態、自らに生產と綜合力をもつ根源的本質 essentia salientalis であり、個性的

なる實體 substantia individualis である。それは無記のものではなくして、既にそれ自身一の意味をもつ實體であり意志規定態である。吾等は歴史的認識にては單なる摸寫說によることも出來ず、又單なる觀念論によることも出來ず、歴史的認識の眞理性は、現實と理解との合致の基礎たる歴史的實體の根本的特質に於てのみ求め來らねばならぬ。かくしてのみ歴史的對象の特有の性質上、及び歴史的認識主觀の個性的多樣に基づく歴史的認識の相對主義より免るゝことを得るであらう。

二

現實と理解との充全なる合致の基礎を求めんとするならば、吾等は當然先きに言へる、この二者が共通の基礎をもつてゐる點にその手がゝりを求めねばならぬ。歴史的現實は實體の表現であり、理解は歴史的實體の能作であり、しかしてともに歴史的實體の根本性格たる時間性に於ける生起である。從つて歴史的認識はこの實體がもつ時間性にその眞理性の基礎を求むべきであるが、しかも尙その現實と理解とは、その生起の時間に於て先後の差違をもつといふ點、且つは又實體相互が相互に個性的であるといふ點が、吾等に認識の不可捉的隔絶を思はしむる問題として横たはる。

歴史的認識のかゝる根本問題に至つては吾等は、おのづから歴史的實體の究極的性質に關してそれがもつ時間の根源樣態のことに考察を歸さねばならぬであらう。（補註一）これを茲に精說することはその機ではないが、歴史的實體はその個性的なる現實的意識と經驗をもつ基柢に、一の根源的意志の絶對的なる創造の作らきをもち、かゝる生產的創造の圖式が根源的時間であり、その生產內容の異質に個性としての意味を與へ、この意味累進の繼續がもつ連續性に歴史的時間の根本形式が見られ、異質の創造の中に含まるゝ空間性の自識は、こゝに質の捨象と現象の量化を可能ならしめ、かゝる量化と測定に於て豫想さるゝ根本形式が卽ち自然的時間であると考へられる。しかして吾等は歴史的時間に尙ほ意味の創造的時間と同時に、解釋的時間を伴ひ含むことを見る。解釋的時間とは、創造的時間の逆に連續を溯つてその意味內容の根源的生產點としての實體に歸入せしめる圖式であり、意味と實體とを究極に一致せしめる能作である。人間的生がもつ現實的發展は常にこの解釋的時間を含み、これに於てあることによつて、すべては歴史的現實となり、歴史的認識の資料となる。かくて歴史上に於ける時間上の相違といふことは、吾等の生に何等かの聯關をもつ限り、全たく隔絶されたるものではなく、その間に連續が認められ、吾等自らの內面の創

造的時間の體驗をもつて、歴史的實體の創造的根源にさぐり入ることが出來る。實に歴史的實體そのものがもつ根源的形式としての時間性こそ歴史的理解の媒介をなす究極の基礎である。

歴史的實體はかくして相互に時間性といふ普遍的基礎はもちつゝも、しかし、尙ほ相互に只唯一性としてのみ、自らを特質づくる個性的實在である。歴史的實體のこの唯一性は常に理解の彼岸にのみ自らを示す獨在性を指示するものではないであらうか。けれども、歴史的實體は、その個性としての意味上の自覺をもつ以前に一の絶對的なる根源的創造の能作をもつものである。異別に個性としての意味の與へられるといふことは、自ら個性が相關に於てのみ可能なることであり、個性の唯一性とは、聯關に於ける唯一の意味的位置づけのことに外ならぬ。意味的な歴史的時間より空間的な自然的時間への脱化は、一の客觀的超越であるが、解釋的時間は、逆に、內への實體的超越の力をもち、現實的意識と經驗とを通してこの根源たる實體の把捉をなしうると考へられる。それはひとり生に於ける創造的時間を逆行して時の理解を連續に於て可能ならしむるのみならず、個性的現實を辿つてその實體に達し、個性と個性とを連續せしめ合致せしめる。私はこれを、かつて名づけた如くスコポロ

ロギッシュな直觀[註7]といひ、個性的實體のあらゆる表現と徵表の歸入せらるゝ根源點に於て、實體にまで超越し、實體自らの創造的始點に合致する意味にて歷史的實體を把捉しうる能力と考へたい。かゝる直觀とは實體自らがもつ根源的生の創造力そのものが自らに含むものといふべく、個性創造の能作をもつものは又個性の現實をその根源の實體に歸入する能力をもつものといはねばならぬ。しかしてかゝる能力とは、言を換ふれば、自らの創造的根源の自覺に外ならぬ。この根源的なる創造の能力を生の根源としての意志といふならば、この直觀は、かゝる實體の能作そのものがもつ直觀、一の意志的なる直觀といふことが出來る。そは創造力自らの始原の自覺である。表現する多樣と、この實體との一致、認識する主觀と認識せらるゝ個性との一致は遂にかゝる根源的なる直觀の能作によつて可能なる外ない。かゝる直觀は根源にまで超越し、有限を通して具體的普遍を直觀する力である。他の實體の本質を摑むことは、自らの個性の根源の自覺を通して、本質的に明かにせられたる他の個性の根源との合一を求めることである。かくして歷史的認識に於ける異別の個性は合一せらるゝ基礎と方法とを持ちうる。そして上記の三種の時間が畢竟、根源的な創造的意志の生產をその根本圖式としてもつならば、一般に歷史的認識の可能

は意志の根源的能作を普遍的基礎にもつと言ふことに歸する。時間が歴史的認識の媒介をなすといふことも、時間を生産する意志の根本的能作によるのである。生ける歴史と記さるゝ歴史とを、ともに可能ならしむるものはこの根源的意志である。この根源的意志がもつ創造的性格の時間性に現實と理解の一致の基礎を求むることは、單に對象の現實の再現にのみ歴史的眞理の基準を求むる摸寫説とは異つて、歴史的認識を一般に現實と理解との一致を通しての歴史的實體の自覺と解するものである。歴史とは根源の自覺に外ならぬ。

三

歴史的眞理が原理的に可能なることの論證は説いて尙ほ未だ盡さざるものがあるが、私は一應茲に只その可能の方向を措定するに止めて、次にそれが、方法的に如何にして可能なるかを考察したい。

吾等が普通に見出す歴史の記錄や叙述はすべて歴史的眞理であるとは言ひ難い。それらは常に何等かの缺點と誤謬を含んでゐるであらう。その綜合には資料の不足があり、見地の偏頗があり、理解能力の不足がある。けれども又現實に見出す歴史的記述や判斷の中に一般に歴史的眞理なるものはないとは言ひえない。何等かの

歴史的記述の企てと、批評の事實の存することは、既に歴史的眞理を豫想してゐるのである。歴史的眞理はよしそれが、盡くに明かでなく、もしくは明瞭に自覺されてゐなくとも、歴史的認識の內面的規範となつて常に作用してゐる。故に歴史的眞理なるものは事實的には單に理想に止まり、それは完全に實現することは出來ず、終極に到達するをえざる彼岸的なるものであつても、しかしそは又同時に、あらゆる歴史家の史的認識がこれに向つて進むべき理念でなければならぬ。そしてその理念は現實に生ける作用として認識の根柢に働らき、あらゆる歴史的認識に事實として根源的作用を及ぼしてゐる筈である。實にこれあるによつて現實の歴史的認識は眞理追究の努力たる科學性を帶びるのである。原理的に立てらるゝことは又何等か方法的に指示する力をもつてゐる。

歴史的眞理が疑はるゝ因由は思ふに二つある。卽ち一つは上記の如く歴史的對象に關し、素朴的模寫說の見解に立つて、現實の完全なる再認を絕望するによるものと、今一つは、歴史的認識の方法的知見が明になされてゐないのによるのであらう。歴史的認識に於ける對象の摸寫說が單なる觀念論とともに終極の眞理を吾等に保障するものではなく、認識せらるゝものと、認識するものとの合一の基づく實體その

ものにのみ、求むべき根源の存する事は、自ら又歴史的認識の方法の考察と解決の方向とを指示するものである。しかして歴史的認識の方法を明かにせん事は、とり分けこれを根本的且つ本質的に解明せんことは、現代哲學の關心の一つが茲に懸つて存する重大なる問題である。私はこの根本的にして且つ廣汎に亙る問題を、この小篇に解明しうるとは思はない。只併し、一般に歴史的認識の問題に關して、若干の考察を遂げ來つた所の一部をこの小篇に適はしき簡約なる姿にて示すことを許さるゝならば、歴史的實體の基本的性質に依據して、これに一皆を歸入し、これより一皆を構成する基礎的能作をなす三つの方法を考へうると思ふ。それは時間的還元、意味的還元、實體的還元と呼びうる。先づ時間的還元とは、吾等がある對象に關して見出しうる一皆の資料を、時間の相の許に直觀し、一皆を根本的なる時間的性格に還元し、純化することをいふ。それには資料を時間に從つて系列し、その個々がもつ徵表もしくは特質を時間もしくは時代といふ見地の許に檢し、若くはその時間的性格を明かにとり出さなければならぬ。そしてこの事は、自ら時間的に相矛盾するもの、時間的徵表に於てその條件を缺くものは除去し去るといふ資料批判の役目をもなす。すべて資料批判の根抵にはかゝる歴史的時間の直觀がなければならぬ。卽ちこれ

は資料が史實として認めらるゝ第一の條件として、それが時間の中に生起し、生產されたるものとしての性格に於て矛盾なきを檢證するばかりでなく、歷史的なるものがもつその制作の根源に於ける根源的時間の性格に歸入し還元しようとする。それはあらゆる歷史的なるものを、根源的時間の創造的根源に還元し、この見地の許に資料がもつ時間の根本的性格を直觀しこれによつて純化することである。歷史的なるものは如何なるものも時間的性格と、徵表をもたざるはない。「時」の相に於てあらざるものは歷史的なるものではない。古文書がもつ書體、塑像がもつ樣式、すべて時代を物語つてゐる。例へば茲に空海の研究を例にとるならば、彼に關する一皆の資料は彼の誕生の日より寂定の日まで、時間的にこれを系列して毫も矛盾はなく、重復はなく、その時代の生成として何等の不純を含まざる筈である。今叡岳要記、謚號雜記に載する所の空海が最澄に送る悉曇の疑問を質したる書狀は、よしかりに、最澄が悉曇に關する造詣があつたといふことが假定さるゝとしても、その文中に記す『大同三年入帝都、普弘傳東寺西寺』とある記事が、空海の入京せしは大同四年であり、東寺西寺に弘傳したるは弘仁十年以後の事なることが確實に證さるゝ所より、この文書は僞作なることが斷定されうる。また彼が癩病のために入滅したといふ廣く

行はるゝ傳說は、天長八年五六月の間、『惡瘡起體』の故に、大僧都を辭せんことを請へる上表の記錄並びに、大師御行狀集記に頰癰瘡の記述あること、且又『自有終焉之志』[註8]といふ續日本後紀の記事や自ら『水漿を斷つ』て死を選んだといふ事實と相俟つて聯想さるゝことではあるが、しかし、この事は同じく大師御行狀集記に癰瘡は修法によりて頓みに平復すとある記事、並びにその後天長九年二月紫宸殿に於て宗論の議に列せること、同八月高野山にあり、翌々承和元年二月東大寺に法華經を釋し、三月比叡山に於て西塔釋迦堂の落慶供養に參列したこと、承和二年正月內裏眞言院に御修法を嚴修す等の動かし難き時間上の事實[註9]は三月高野山に於て入寂するに至る迄、相當の激務に從ひ、且つ淸淨の身にあらざれば屢々宮中に參入しえざるべく、又彼に於て遠慮すべきことの推理等よりして、彼の死因は恐らく癩病ではなかつたらうと斷じうる。かくの如く史的認識の素料をなす史實そのものと、それの認識判定に根本の制約をなすものは、實に『時間』である。彼が用ひたとして、もしくは彼に關係あるものとして今日に殘る調度、用品、肖像、文書、繪畫、彫刻、すべて時代の條件、時代の樣式の制約の許にあらざるものなく、これを彼のものとし、彼のものにあらずとする必須の條件は實に時間適合的又は時代的特徵をもつといふことである。これ歷史的なる

ものは、すべて根源的に時間的なるものゝ生成たるを歴史的認識はこれを跡づけるものとして、根源的時間に還元し、時間的生成として直觀して、時間の相の許に純化し再構成するによるのである。この時の見地の許にする資料の再構成は、その系列と批判とに於て歴史的認識の基礎を確定する上に本質的に必要のことである。資料が史實として價値あることは先づ『時』の條件を充たせるによる。

次に意味的還元とは既に時間的に確定されたる資料、史實に、その個々の意味を見出すことである。否資料そのものを根本的に意味的なるものとして直觀することである。先きの還元は單に時間的なる系列であつたと言へば、これは意味の連鎖に、自ら又歴史的因果に從つての系列である。先きのは時間的條件の充足であるに對し、これは個々がもつ意味聯絡の條件の充足である。歴史的因果とは、單に時間の先後によつて成立するものではなく、前者は必然に唯一なる後者を牽き起しうる理由を含み、かくて兩者は意味的相關に於て相互に史料的價値を帶びる。暴風あつて林野の大木の一つを仆したといふことは、只自然的必然によつて說明さるゝ事實たるに止まるが、弘仁十四年正月十九日嵯峨天皇が空海に東寺を賜つたといふ事實は、天皇が既に他の目的にて建てられてあつた東寺を、特に密敎修行の道場のために、他の

僧ではなく、空海に賜はつたといふ意味に充ちたる事實であり、他の如何なるものとも意味的に相違せる唯一的なるものゝ相關によつてなる事實として歴史的なる意味を構成するものである。かゝる事實は單なる一の事實といふよりも寧ろ一の意味的存立である。これは史實の一皆を意味の見地の許に根本的に見直すこと、有意味化すること、根源的に意味の聯關に歸入する事によつて可能である。意味といふ一の基礎的直觀によつて史實を有意味的存立に化する歴史的認識の基本的一作用である。事實に於て意味をさぐつて、意味の根源に還り、この根源よりして事實を有意味的に再構成し、これを根柢より意味的なるものとして理解することである。かくの如くするときは、空海が生涯に行つた行爲はその一々が意味となり、有意味的連續となり、しかも個々に唯一獨殊の意味をもつ連續として理解せられる。吾等はかくて空海が少年の日、吉野より紀州の山嶽を拔渉したことが、後年の高野山造堂と有意味の聯關をもつを見、久米寺に大日經を見習したことが入唐して惠果に就學した動機となるを見、史實は個々に意味聯關をもつ事となる。歴史の聯關は單なる時間上の因果系列ではなく、意味聯關の因果であり、その意味聯關の因果に於て見ることが、實に歴史の理解に外ならぬ。時間的還元は史實をして初めて史實、とならしめる

ものであるが、意味還元は史實を初めて史實たらしめるものである。それは與へられたる史實に單なる考察されたる意味を見出すことではあるが、しかしそは方法論上よりいへば、史實を史實として構成する根本的直觀を意味する。史實が眞に歴史的に取扱はれるときは、それは根柢的に意味化されるのである。意味化されることによつて却つて史實の存立性が全たくされる。意味を見出し、意味の聯關を作るといふ根柢には、一皆を有意味的に見直す根本直觀がある。意味的還元とは、一皆の史料、史實を史的認識にもたらす根本制約であり、一先づ一皆をこれに融かしこむ根源の坩堝である。それは既に決定されたる事實に意味を附會し、もしくは單に假定するものではない。そしてこの事は同時に又却つて資料の批判的精査ともなり、本質的に意味なきものは捨て去らるゝこととなり、又意味聯關の因果の說明の至りえぬものは、歴史的認識として不充分なることを示す。しかし又歴史は盡くの史實を吾等に供するものではなき故、時間的還元によつて遂げえざりしものを、吾等は意味聯關によつて補ふことを得、又これは時間的還元と相伴ひ同時に行はれることもある。時間の見地の許にては、すべて時の中に起りしものは、史料としての價値をもつであらう。しかし、これの盡くではなく有意味なるもののみが史實として史的認識にと

り入れらるゝのはこの意味的直觀によつてゞある。この意味的聯關に於て、或る見方よりすれば無意味に近き一時間的生起も、意味づけの傍證として、もしくは反證として重大なる意味をもつこともある。しかしてすべての史料を意味的に還元しうるといふ事は史料そのものが歷史的實體の有目的的活動の所產たるによる。意味的還元とは畢竟歷史的實體自らの創造的意志の根源に歸入し、その創造的主體に於ける意味目的に還元し統一することである。

意味的還元のこの根本的特質は遂に第三の實體的還元に導く。實體的還元とはかくして獲られたる歷史的資料の一切を一の個性的實體に歸入し、これによつて全體を一の歷史的實體の根源的作用に還元し、綜合して、認識することである。史實はこれによつて初めて史實として全たくされるのである。時間的還元と意味的還元とは歷史的認識に缺くべからざる根本制約ではあるが、しかし、全體としての歷史的認識の成立より見れば、尙ほ前階たるに過ぎず、これに比して實體的還元とは殊に歷史的認識の實體的構成の側であり、歷史的認識はこれによつて完成せられる。意味的還元とは例へば、時間的性格をもち、有意味なる個々の資料の一切を空海といふ個性的人格の內面的創造としてこの個性的實體に卽する意味として理解することで

ある。時間的系列といふことも、一の根源的なる創造による連續となし、有意味の聯關といふものも、一の中心主體より出づるものとして、初めてその認識は全たいのであつて、時間的還元も、意味的還元も、この實體的還元をまつて初めて歴史的認識としての意味を全たくするのである。時間的系列は意味聯關のためであり、意味聯關は歴史的なる創造的實體の有したりし目的性、意味性を豫想して可能であつた。實體還元は實にこの實體に卽しその創造的根源に歸入して理解する。時間的系列を作ることは意味聯關を見るためであり、意味の發見は、その意味を個性的なる實體に歸入し、唯一なる主體の根源に歸入することによつて初めて全たい。史料に於て意味を見出すといふことも、その創造的個性がもつた內面的有意味性をはなれては不可能である。その意味とは後世の歴史記述者の附會する單なる意味であつてはならぬ。後の認識者が認めたる有意味性は必ず歴史的實體自らがもつた有意味性、目的性と一致し、聯關しなければならぬ。かくしてのみ意味は初めて實的なるものとなり、實體性に屬するものとなる。歴史研究が史實をはなれ得ないといふことは、究竟歴史的實體を離れ得ないといふことであり、これ歴史研究が單なる文藝やその他の思想形式と異る所以である。

しかしてこの實體的還元は內面化といふことと必然化といふことの二つの特質をもつてゐる。卽ち歷史的實體は自然的な固定の存在ではなく、生ける實體であり、それへの還元とは一皆の資料をば、その實體の內面的體驗の內なる要素とし、これを內面化し作用化し、實體の內面的創造に於ける原始樣態にまで歸入し、還元することである。この言はゞ作用化は時間的還元にあつても、それを徹底すれば終に內面的創造時間に歸せられるのであるが、これを茲にては、唯一實體に歸することによつて、唯一實體を創造始原として、時間的系列をそれの生產と見るのである。今一つの必然化とは、この實體が宇宙の古往今來を通しての唯一の個性的實體なるが故に、先の意味聯關に於て見出されたるものは、この唯一性の見地の許に唯一的なる必然的聯關を作りなすものとして見られるのである。しかして一皆の時間的意味的なる史實の、これに歸入せられ還元せらるゝ實體とは、後に詳論する機會のあらう如く、たゞに自然的人格たるのみならず、一の目的的にして個性的なる性格をもつ以上、社會的團體、流派、時代の如きも、それが一の個性法則をもつ限り、かゝる實體と考へることが出來る。しかしそれの精密なる歷史的考察は、終にはそれに主要なる作用を働く自然的人格自らの體驗に於ける內面的必然に歸入するの外ないであらう。（吾等は例

へば光琳派なるものを歴史上に存する一の實體として取扱ひ、それがもつ個性と內面的法則性と他への相關影響を獨立的に考察することが出來る。しかしこれの充分に精細にして具體的なる考察は終には光琳、宗達、抱一等の主要なる自然人格の主觀的理念とその作用的特質について考ふるより外ない。）かくて先の還元的方法によつて見出されたる意味は、すべて一の實體の內容をなす必然的なる要素となる。聯關はこゝに實體的なる體系となつて規定され、その個々の要素は個性的なる實體と唯一にして必然なる關係をもつものとして規定せられる。歴史的認識に於て、すべてに目的統一を作り、すべてを根源的に實體の綜合に高めるスコポロギッシュの直觀、歴史的なる超越的構想力はこの實體に達し、すべてをこの實體に規定されると考ふる所に極まる。固より茲に必然といふのは、自然因果の必然ではなく、目的論的性格をもち、個性法則に合した必然のことをいふのである。例へば空海が弘仁七年に至り修禪の道場を高野山に建立せんと決心したことは、決して單なる偶然でもなく、恣意でもなく、これに關する種々なる事實の綜合的考察は、唯一的實體としての空海の性格より、必然にあるべきこととして、理解するものであり、これの眞なる意味は、單にその時間的系列によつて、又單なる聯關的見地のみよりしても、明になしえざる

ものと言ふべく、唯空海といふ個性的實體に還元し、彼の唯一選擇決意の事實として、すべての理由を彼自身の個性的實體に歸入し說明さるゝことによつてのみ解明しうべきことである。そしてかゝる見地より見るならば、空海生涯の一皆の史實は彼の實體より出づるものとして、それ〴〵に必然の意味を帶び來るのである。唯一の個性的實體の創造として、一皆が必然の意味的聯關に於て理解せられるのである。しかもこは時間的、意味的聯關の究極の必然をさぐりゆいて、終に達しうべき實體的な歸入點であり、そは還元の到達點であるとゝもに、又實體のあらゆる徵表の綜合の中心點であり、實體把捉の基點である。歷史的認識とはかくて、この基點を根源として、すべての史料、史實を生動化し意味的に必然化することである。史料、史實を一たびこの根源に歸入し、還元し、さてそれの根源よりの意味的創造として、その有意味性を後づけることである。一見して或は偶然と見ゆる史實に必然の聯關と根據を與へるものはこの實體的還元である。歷史的認識はこの根源の理解に於てその究極に達する。これへの眞の到達のみが歷史的知識を認識として保證づけ、この實體的必然性が初めて完全に歷史を科學たらしめる。

歷史的研究法としての上の三つの還元的方法は、決して現實の研究的方法と疎遠

のものではなく、只現實の歴史的研究に原理的に含む所のものを自覺的にとり出したものに過ぎない。そして私の意圖の如く、この三つの方法は歴史的意識の三つの根本作用――生産作用、相關作用、超越作用――と基礎的なる關係の存することが肯はるゝならば、これは歴史的認識の方法の歴史意識的基礎づけであるとも言ひうるであらう。從つてこれは歴史的認識に必然的なる本質として含むものを自覺し、學的に純化したものであり、現實の歴史的研究が方法的自覺の上に立たんとするならば、それの個々に指針を與ふる方法的原理となるであらう。

史學研究法としての年代學、古文書學、解釋學、その他種々なる實際的史學研究法は、すべて上記の三つの還元法のいづれかに關係するもの、もしくはこれらを豫想するものと言はねばならぬ。そしてこの三つの還元法は、歴史的認識の方法論として最も本質的且つ基礎的なるものを形作ると思はれる。一般に從來の史學の研究は時間的還元に基づく所謂史料の確實性に專ら努力が注がれ、却つてそれの意味聯關を見出すこと少く、その內面化が閑却されてゐたるの觀がある。まして個性的實體よりの歴史的必然性の說明に至つては、極めて老練なる史家が無自覺的にこれに成功せるもの以外には、多くは考慮を費やされてゐないかの如くである。單に史料を批

判して、年代學的時間に排列することのみにては、そは未だ歴史的眞理への到達の豫備的なる基礎段階を逐行したるに過ぎない。もしくはそれの單なる意味推及が、歴史的實體への歸入に於て、眞の學的必然性を認め出さないならば、文藝的作品と異る所以を見出し難い。

歴史的認識に於けるかゝる方法的過程はおのづから又歴史叙述の形式に關係する。歴史叙述が探究的解釋的であれば、時間的、意味的還元をへて、實體そのものの把捉に向はんとし、叙述が說明的演繹的であれば、既に明かにせられたる實體を前提して、史實をその意味聯關、時間系列の中の、說明さるべき一項として解義し、一の根源よりその位置と意味とを規定する仕方をとる。この何れに從ふかは史實の性質と史家の態度に依存するものである。併し實際的なる史的研究にてはこの兩者は並行して用ひらるゝこと多く、相互の相關に於て歴史實體の探究と說明を進め行くものである。

四

さて上述の如き原理的自覺をもち方法に適合したる歴史的認識は、おのづから對象たる實體の把捉といふ目的にも適ふもの故、それは歴史的眞理であるといふ事が

出來る。例へば弘仁年中、空海、高野山に金剛峯寺を建立したといふ判斷は、歴史的な眞理でなければならぬ。これの歴史的現實としては、空海といふ一個性的實體がこれに關して種々に經驗し、思惟し、言動し、筆錄し、實行したる事、彼れ及びこの事件に關係したる、上は嵯峨天皇を初め、多くの弟子信徒、民衆等のこれに關する一皆の經驗を含む。それは、まさに無限の內容をもつものである。然るにそれの筆錄され、若くは傳承されたる資料は極めて尠く、然も、その中には多くの現實とは阻隔せるものもあり、種々なる解釋や、巨大化して與へられてゐるもの等も多いであらう。殊に空海の如き、自らも思想上神祕主義的傾向を有し、特に祕密佛敎の始祖として、その傳承は多くの想像と誇張に於て、それの崇高さを權威づけんとする傾向をすらもつに於てをや。これに對して歴史的認識は先づ、それをすべて時間の見地の許に精査し、純化しなければならぬ。歴史的時間に於ける事實はすべて一回的なるもの故、同一の時間に二つの矛盾する事實の起りうる事なく、然してその時間に於て起りたるものは、凡て時の徵表をもつて表現し、構成されてゐる。例へば、京都東寺所藏、李眞畫、空海賛、不空三藏像は唐及び弘仁期の製作としての、凡ゆる時の特徵を表現し、その表現がもつ時の特徵の一皆に於て、それがその當時の眞の創作物たる事を證しうる。次に意味、

の見地の許に、それ〴〵に特有の意味を、この現實全體の中に於て見出さねばならぬ。こゝに個々の事實の解釋といふことの能作が充分に發揮されねばならぬ。しかし又それに於ては解釋の多樣が存し得、否、相互に矛盾することすらあり得ることである。例へば空海が、高雄、東寺以外に何故に新堂を殊に高野山に築造したかといふことの解釋に至つては種々なる可能を考へうる。少年の日に山上宏濶の地を發見し、その當時の伽藍建立の冀望を實現したこと、平城平安の都市に於ける佛教修練の腐敗を矯正する手段を見出さんとせしこと、支那山嶽佛教よりの影響、南都北嶺に對する對抗の必要を感じたること等、そして或は彼の內面に於て却つて强き直接の動機となつたものは、僧中璟の宮女艶詞事件にかゝはつての感動[註10]や、往年吉野よりこの地に入り、幽邃の林間に、後に丹生明神として祠祀せられた獵人の素純なる性格に對する感激などであつたらう。凡そこれらは空海の野山建立について考へられうべき種々なる意味であるが、恐らくこれらすべては、ともに相聯關して、相互に相矛盾なき一の固有の意味を空海の全生涯に對してもつのであらう。意味還元に於ては野山の伽藍造築といふことは、一つの意味目的によつて指導されたる有意味の行動、目的實現の働きとなる。このことは自ら空海といふ個性的實體への接續を意味し、これ

の實體還元によつて野山建立の事實に關する一切の時間系列と意味聯關とは、空海といふ一個性に關係せしめられたる必然的事實として認識せられる。しかして以上の如き方法的に確立される意味内容を含めて、空海金剛峯寺を造るといふ判斷は、歴史的眞理となる。世に歴史的事實に關して多くの解釋の存し、時に相矛盾するものあるは、時間規定の不明確なるか又はそれが含む諸要素相互の意味聯關の不充分にして遂に實體還元が完全に遂行せられざるによる。例へば前掲東寺藏不空三藏像が眞に唐と弘仁期の製作物であることの眞たらんがためには、かの賛の文字が、たゞに寺傳によるのみならず、眞に空海の筆たるものでなければならず、それが眞に空海の筆たることは、深く空海の筆蹟に通じ、且つは何よりも全體としての空海の人格と個性に通曉し、理解せる歴史的理解をもつてして初めてその然ることを認識しうる。歴史的認識は必ず個性的實體の理解を伴はねばならぬ。意味の聯關の根源は實體そのものの能作に歸入され、歴史的實體は唯一でなければならぬならば、それの内容をなす意味聯關と時間系列に相矛盾する多樣はありえない。もし又後の覺鑁が眞言宗義に改革的見解をなしたることは空海自身の思想の發展なりや否や、といふ如き解釋に至つても、それが歴史的なる見地に卽する限り、覺鑁によつて改められ

たる思想が、空海自身の個性的實體に適合的なりや否やといふ點よりのみ解決さるべきものであらう。歴史的認識は感性的直觀に與へらるゝもののみが、その資料となるのではなく、資料相互の系列と聯關の關係に於ける充分なる根據をもつ推理、批判は不可缺の方法として價値をもつものであり、殊に實體に關係せしめてのスコポロギッシュの直觀は歴史的認識のすべての根抵に作用せるものである。此の、いはば實體綜合的直觀は歴史的認識に於ける三つの還元の根抵を貫いて存する一の根本的な歴史的直觀である。

吾等は、資料に於て盡くの現實に關するものをもち得ないといふこと、卽ち歴史的認識は常に有限の資料をのみもつて、その認識を構成せねばならぬといふことは、決して歴史的認識の眞理性を否定すべき理由とはならない。感性素料と經驗の有限性といふことは寧ろ認識の一般の通性である。自然科學に於ける眞理といへども、吾等はそれに關する盡くの經驗を現實的に經驗してゐるのではない。只盡くの起りうべき領域の本質に就て把捉してゐるに過ぎない。歴史的眞理も亦然り、吾等は歴史的實體の、又は存立の盡くの現實を再現し、まして體驗する事は出來ない。併しその資料がその個性實體の徵表を表現するに必要にして且つ充分なるものであり、

その認識の方法が方法適合的であれば、歴史的認識を完成するに充分である。實體の表現は畢竟象徴的なるものであり、如何なる徴表もその根源を實體に於て一にし、自ら一に於て一皆を具するものであるならば、その表現に對する認識は理想としては一に於て一皆を、その表現の一を通して實體の眞を知りうべきものである。しかし現實の問題としては、史料に於てはこの必要にして充分なる資料を缺くときは、歴史的認識は不完全たるを免れない。かゝる場合は、他の資料の聯關に於ける推理、彼の個性的本質の上より演繹して、少くもそれの消極的肯定をなしうる事も多い。空海が果して最澄に對して法敵としての個人的反感を懷いてゐたか否かといふことは、最澄が『諸佛所知、都無異心』として禮を盡して請へる理趣經の借覽を峻拒したことや、辭を卑くして叡山の法燈に歸らんことを勸奬したる最澄の弟子の泰範に、殊更に空海が代つて答書を送り、その絶緣を通じたる等の事實は[註11]吾等にその私情のなきにあらざるやを推せしめ得るとは言へ、しかし、空海自らの、及び、その當時の側近者の行狀記錄の積極的にこれを示すものはない。しかしこれに關する種々なる記錄の聯關的構想は遂に空海といふ個性の特性の上よりの實體的演繹を可能ならしめ、一の決定的なる歸結を導くことも可能である。卽ち元來最澄は天台、眞言、禪、戒の綜

合を理想とし、おのづから眞言の研究は參考的態度を出でざるに對し、空海は眞言密教を至上の原理とすること、この顯密の信仰上の差違の根柢的なる上に、空海は法を重んじて、人情を從とした遵法の精神より、この行爲は出でたといふ判斷が、他の確實なる資料によつて得らるゝ空海の全人格の性格よりして妥當に下し得る。有限の資料をしかもちえないといふことは、寧ろ歷史的認識の特質をなすものであつて、顯はにされたる資料が必要にして充分なるものを含む限り、そして缺くる所のものはこれを方法的に補ひうる限り、これによつて一の積極的なる歷史的眞理は成立しうる。吾等は單に感覺的に證明されうるもののみを歷史的眞理とする實證主義の方法的に偏せるを知るのである。以上の事は原理的に主張されうるものであるが、併し事實的に、現實の歷史的研究の成果の盡くが、すべて歷史的眞理を示してゐるとは言ひえない。その本質的資料の缺乏の故に、又は方法的自覺の缺欠の故に、史家自らの立場の非本質的なる特異性の故に、歷史的實在や存立は、それが複雜なる內容をもてばもつ程、その眞の認識は、無限接近の過程 Progressus ad infinitum たるに止まつてゐる。しかしこゝに歷史的探究の無限の使命はあるのであつて、歷史的眞理なるものは歷史的認識を通して、その理想となり、內面的規範となる所に、寧ろこの本質をもつ

のである。

歴史的認識に於ける資料取扱は上記の如くに方法化せられるとしても、吾等は尙ほ歴史的眞理に關して、他に種々なる根本問題の存するを見る。歴史に於ける資料は個々に特殊の事實の記述であり、これを綜合的に把捉する史家自らも、亦個性的見地を離るゝをえないならば、歴史的把捉は畢竟特殊的偶然性を脱するを得ないのではないであらうか。

歴史に於ける資料は固より自然認識に於けるが如く、何處に於ても平等なる、卽ち時と處との條件を超越せる物質もしくは一般的法則に關するものではなく、この時、この人に關して意味ある特殊のものである。しかも資料が單なる特殊性以上の意味をもつ所以は、一つの資料そのものが對象に卽してもつ實體性の故に、他面資料が方法に卽して含む人間の理解性の故である。資料とは何等かの存在、生起の事實、もしくはこれに關する記述であるが、その存在もしくは生起といふものが、赤裸なる自然的事實ではなく、既に何等かの意味にて人間の營みであり、少くも人間に關するものである。毫も人爲の加はる事なく、人間的意味の附け加はる事なき歴史的資料なるものはありえない。從つてそは既に何等かの個性的實體によつて實現され、もし

くは關係されたるものにあらざるはない。資料の中には、或は彗星の出現といひ、白虹の現象といふ如き純然たる自然現象もあるであらう。しかし、それが歴史的意味をもつ限り、人間事象に關し、人間によつて有意味化されたるものである。或は又營造物の如き、又は社會的變動の如き、一の全體的なる文化の中に於ける被創造物として單なる離在的特殊の存在ではなき上に、そは、一の有力なる個性人格の力によるか、又は個性を具有せる社會的實體(一の團體、時代といふ如き)による生産物である。繪畫に於ける土佐派といひ、光琳時代といふ如き既に充分に個性をもてる歴史的實體である。かくして歴史的資料は畢竟は廣義に於ける個性的實體の創作である。歴史的實體は必ず個性的であり、うちに一の必然性を具する實體である。歴史的資料は究極にはかゝる實體の生産物として、それ自ら個性的意味をもち、歴史的實體の內面的必然性に關係せしめてのみ歴史的認識の可能の許にあり、存在そのものとして、既に單なる偶然性を脱してゐる。そしてこの事は自ら又史料はこれを如何樣にでも理解しうるといふ如き、それ自身空虛なる素料ではなく、一の實體的な唯一的な規定態である。唯この唯一に規定されたるものを史家によつて見出され、理解されようとする。私はこの點に於て、史料がもつ實體性關係性の上より、歴史的認識の單な

る主觀主義を排する。

資料はかくそれが含む實體性に於て既にその生產者によつて附與されたる一の必然性をもつとともに、更にそれが把捉され、說述されたる方法の上に於て、既に又思想的規定を受けてゐる。それは把捉されたる意味に於て普遍性をもち、單なる特殊以上の客觀性をもち、これによつて史料適合性をうる。單に特殊として、何等の深き根源の基礎を持たず、毫も他との連繫をもたぬものは史料たることは出來ない。クロウチェの言葉をかれば、それはその具體性をもてる普遍の特殊形式をもつものである。史實はこれを普遍として理解する、卽ち現實として思惟し、特質によつて性格づけるより外に理解することは出來ない。[註12] クロチウェが歷史と哲學とを同一化しようとするのも、歷史的思惟に普遍的基礎を認め、哲學的思惟に具體性を附與せんとするに外ならない。從つて彼が哲學はその差別を深く貫き、微細にするに從つて、それだけ深く鋭利に個別を究めることになり、そして個別を力强く抱擁するに從つて、それだけ多く自己自らの概念を力强く得てゆく、と考へ得たのも自然である。個性を究めることは畢竟それの普遍的基礎をさぐることである。私は又この意味に於ても歷史的認識を單に認識する個性の主觀に依存するとする主觀主義を排する。

最近の自然科學に於て言はるゝが如く、觀察することが、その用ふることを必然とする方法の故に、却つて對象に干與し、これを固定化し、對象そのものの眞の把捉は畢竟常に方法に相對的であり、ある意味にては反比であるとすら言ひうる。この事は歷史的認識の場合にもあてはまりうること、恰も歷史的實體は認識する主觀に依存し、これとの相關に於てのみ把捉され記述されるのであらう。しかし歷史的認識がこの單なる相對性以上の特色をもつ所以は歷史的認識は究極には實體の自覺である故に、認識作用の愈々照明し、その活動の深化し、その方法の鋭利となるに應じて、却つて全體は益々その明度を增す點にある。認識手段と認識對象との深化と明瞭化は正に比例するといふことが出來る。歷史的認識に於てはその用ふる方法といふものも、對象たる實體に對して外的に加へらるゝそれと別殊の起原をもつものではなく、却つて認識せらるゝ實體と、認識する實體との根源を明瞭化ならしむる自からの自覺に外ならない。

歷史的個性はその認識せらるゝ對象としても、認識する意識としても、決して單なる特殊個別のものではない。個性は孤ならず。個性は實體としては個性的であるが、それの見出す位置と意味は必ず相關に於てある。それのもつ唯一性は絕對的孤

立を意味するのではなく、相關に於てのみ示しうる意味の獨自性である。個性とは絶對孤立の非連續的なるものではなく、相關に於てのみその意味を發揮し且つ認めらるゝもの、只相關に於てのみその獨自性と異別を示す不連續的なるものである。併しこの不連續とは本質的に相關を拒外するのではなく、異別はその相關を必然とし根源的なる連續性を豫想してゐる。この事はその經驗的に意識せらるゝ個性的作用の根源に於て、個性てふ自覺の生ずる以前の根源的創造に於て、すべての個性が一たる基礎の存するによる。その根源に一なるものをもつ以上、歴史的個性の普遍的性格は否む事は出來ない。認識せらるゝ個性的實體と、もしくはその法則性と、認識する個性實體との異別は個性を創造する根源的意志を一にする點にその究極歸一點をもつと考へうる。吾等の歴史的存在のあらゆる能作が畢竟は個性的制約より離るゝを得ないにしても、それの本質の相に於て、それの實體に關して、一皆の個性的なるものゝ根源に關して、歴史の形而上學的考察がそれを超ゆる基礎と解明を與へるであらう。かくして歴史の資料や認識者としての個性は、たとひ個性的であつても、單なる離在的個別を意味するものではない。單なる特殊とは離在的であつて、普遍的基礎をもたぬものを言ひ、從つてこれは、眞理をもつ認識を作る事は出來ない。

然るに歴史的個性は決してこれではなく、普遍の基礎をもつ唯一的なるものとして、それ自ら固有の實體性、法則性をもつ。但し歴史に於て見出さるゝ法則性は、自然に於ける普遍的必然的なるものでなくして、個性的必然的なるもの、實體的必然性をもつものである。それは決して單なる偶然性ではない。(補註二) かくして歴史に於ける資料はその把捉せらるゝ對象の實體性の性質に於ても、果た又資料が既に含む認識の方法的性質に就ても單に特殊的ではなく、歴史に固有なる個性とは單に偶然的なるものでないことは、歴史的認識をして單なる主觀主義と懷疑論より脱せしめて、科學的たることを保證しうることを、その實質の側より支持するものである。マイヤーの如き深き歴史哲學的考察を費したる人によつても、尚ほ且つ、原理的にも方法的にも、懷疑より自由に、充全にして且つ積極的に定立さるゝことの出來なかつた歴史の體系的科學性[註13]は、體系と法則の概念を自然科學にのみ基準を求め、自然科學的ならざるものを非科學的とする偏見に基づくことなく、歴史的認識の基礎的原理に對する獨自にして且つ執拗なる思索力を俟つて初めて吾等に齎らさるゝものであらう。

註1　Voltaire: Oeuvres Complètes. 1791—. T. 13. 266., T. 19. 346., T. 20. 559.

註2　W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften hrsg. v. d. Preuss. Akademie d. W. Bd. 4. 1905. S. 35f. Bd. 2. 1904. S. 332.

註3 Dilthey: Gesam. Schrift. V. S. 330.

註4 坂口昂、獨乙史學史、一九五頁。

註5 大類伸、史學概論、二〇二頁。

註6 Hegel: Vorlesungen ü d Philosophie d. Geschichte. hersg. v. Brünstäd. S. 103.

註7 Geisteswissenschaft and Willensgesetz. Kritische Untersuchung der Methodenlehre der Geisteswissenschaft in der Badischen, Marburger und Dilthey-Schule. 1931. S. 99 f.

註8 日本紀略、淳和天皇、天長八年六月、大師御行狀集記第八十四、續日本後紀四、仁明天皇承和二年三月。

註9 高野大師御廣傳下、天長九年正月ノ條、日本紀略、淳和天皇天長九年正月條、續遍照發揮性靈集補闕鈔八、東大寺要錄四、御院章及心經祕鍵蛇鱗記、天台座主記一、華頂要略百廿所收、叡岳要記下、宗要記及後七日御修法阿闍梨名帳

註10 遍照發揮性靈集四、請赦元興寺僧中璟罪表一首。

註11 續遍照發揮性靈集補闕鈔十、仁和寺記錄十九、性靈集補闕鈔十。

註12 Croce: Zur Theorie und Geschichte der Historiographie. 1915. S. 49.

註13 Meyer: Zur Theorie und Methodik der Geschichte. Kleine Schriften 1924. S. 31 f.

補註一 この小篇は、私がかつて物した Geisteswissenschaft und Willensgesetz の考想を一般に歷史的世界の認識に推及して考察を辿つた未定稿中の一小斷である。それは歷史的意識論、歷史的認識論、歷史的實體論に三分し、その第一篇は主として直觀論として歷史的時間を取扱ひ、第二篇は範疇論として歷史的認識に於ける個性の意味を見、第三篇は法則論として個性的實體に於ける必然性を考究する。この小篇は第二篇の中の一斷であるため、歷史的時間論を前提し歷史的實體の概念を後に豫想してゐる。從つてこの小斷のみとしては、充分なる理解をうるに困難を感ぜらるるものが多いであらうと恐れてゐる。いづれ他の部分と併せて批正を得る機のあることを望んでゐる。

補註二 尙ほ個性的實體の連續性と必然性に關しては、別殊の考察を遂ぐる他の機會に讓りたい。